

こぼればなし

づだなかせのはなし ①

むかしむかし、一人のまま子がおったんだとお。夕方に山の向こうへ使いにやらされることになったんだとお。まだ秋の日は明るいしもどって来れるから、ひと走りいってこい。ママ母はつれなくそういって、ふろしきに包んだものを渡したんだとお。まま子は泣き泣きいつけられるまま、それを持って山の向こうへ出かけたとお。ゆかないとしかられる。それで出かけたが、夕焼が明るいので日暮れにはまだ間があると小径をのぼって行ったが、秋の日はつるべ落としという夕焼空は急に灰色になり、みるまにやみとなってしまう。どこが小径か、途方にくれてしまったんだとお。あとでみんなはまま子がどうなったかを知るものはいねえでなあ。夕焼空を見ると、あれはづだなかせとそう呼んだとお。

親孝行の息子のはなし ②

むかしむかし、親孝行の息子がいたんだとお。山に柴刈りに行って仕事をしていると、そこに汚ないしらの婆さんがきたんだとお。そしてなにをするのかとこの息子は刈る手をやすめて見ていると、婆さんは日なたの落葉の上に坐って、しらみとりを始めたんだとお。しらがの髪の毛やえり足とぶちつ、ぶちつとつぶす音がしたんだとお。やがて息子のいることに気づいて「やれやれ、若いもの。わしのからだにしらみがたかつてなあ。かゆくてかゆくてたまらねえでなあ。若いもの、背中の上をのしらみをとってくんねえか。」そういってしらがのお婆さんは首をさしのべだとお。息子は汚ない婆さんだし、しらみをとってつぶすことは気味が悪い